

人が幸せになるお手伝いをする仕事

及川智志（千葉県弁護士会）

宮城県名取市にある「少年の家」の運営、保護司、少年院向けラジオDJなどの活動に取り組んでいる「大沼えり子」さんによる、「司法と福祉をつないで」という講演が昨年12月にあり、聞いてきました。2時間にわたった講演の一部を紹介させていただきます。

①大沼さんの息子さんの小学校の同級生のなかに、お母さんが精神障害で家事ができず、ごはんもほとんど食べられず（給食で飢えをしのいで）、妹とゴミ屋敷に暮らしている子がいました。それで大沼さんがお母さん代わりをして、その子にごはんを用意したりいろいろと世話をしていました。あるときその子が消しゴムを万引きしました。その理由は、妹の消しゴムを買うための100円でカップラーメンを買ってしまったからです。そのときは大沼さんが忙しくて十分に面倒を見てあげられず、何食か食べることができなかったその子は、ひもじくてカップラーメンを買ってしまったようです。それですごく妹に泣かれ、困ったその子は、スーパーで消しゴムを万引きしてしまったのです。そのことがあって以来、その子は、大沼さんの家に寄りつかなくなり（信頼を裏切ってしまったのでしょうか。）、中学校に入ったころには、すっかり不良の格好で、シンナーの臭いをさせていました。やがてその子が鑑別所にいると聞いた大沼さんは、そのころ保護司を始めたころだったのですが、どうしてもその子を担当したい、と保護観察官を説得しました。その子は、中卒や非行歴があることにつけこまれて違法低賃金労働をさせられたりしていましたが、やがて大沼さんが紹介した鮎屋さんで働くようになりました。そして、ある日、大沼さんを訪ねてきて、「おばちゃん、おれ軍艦巻握れるようになったから食べに来て。」と照れながらも報告してくれたそうです。もちろん、大沼さんは翌日その鮎屋に行き、こんなにおいしい鮎は食べたことがないとボロボロ泣きながら食べました。

②大沼さんは少年院向けのラジオのDJもしています。あるクリスマス、少年院の入所少年全員の名前を呼んでクリスマスのお祝いを伝えました。それを聞いていた少年から手紙が来ました。その子は、生まれてすぐ紙袋に入れられて捨てられ、親を知らず、施設で育ちました。学校を出てから大工の修行をしました。しかしそこで酷く虐められ暴行を受け、逃げ出しました。数日間食事もできず着の身着のままさまよい、死ぬんだと思ったときに、ご飯を食べさせてくれる人がいました。暴力団員でした。その子はそれから暴力団事務所でいいように使われてしまい、足抜けできませんでした。それで少年院に3回行きました。その3回目の入所中、大沼さんにラジオで名前を呼ばれクリスマスのお祝いの言葉を聞いたとき、その子は暴力団から抜けることを決意しました。そして、更生保護施設の空きが出るのを辛抱強く待つ、その施設などで勉強し、ずっと夢に見ていた教員資格を取ることができました。いまは教師として働いています。

③東日本大震災の直後、大沼さんたちは、少年向けの自立準備ホーム「ロージーハウス」を開所しました。入所してきた子たちは、自ら被災地へボランティアに行きました。そして、1日の作業が終わった夕方、その子たちは、泥だらけになって目と歯だけ光らせてニコニコして帰ってきます。帰ってきたその子たちは、決まって大沼さんに聞きます。「おばちゃん、おれたち役に立ってるよね。おれたち生きていいんだよね。」と。大沼さんは、子どもたちは幸せになるために生まれてきた、それなのに生きていく意味すら繰り返し聞かなければならない子どもたちもいる、とおっしゃっていました。

このリレーエッセイにふさわしい内容だったのか、分かりません。ただ、大沼さんは、人が幸せになるお手伝いをする仕事の意義を繰り返し伝えようとしていました。弁護士の仕事の意義、昨今いわれる司法と福祉の連携の意義もまた同じであると思います。

（2017年1月16日記）